三日月日記

へ5
4424

5
10

へ5
4424
特 へ5 4424

昭和九年九月二〇日 購求

三日月日記序

此三日月日記とハ正ゝ之系の神作を
祖翁を武江の深川にいまして
庵主遺集とそ号しとて家々くの
詠草とあつめるゝ素堂隠士の序詞
ありて其を三日月の風流なり各月の
句の物語をまてえらひて三日月日記と

洒竹文庫
蔵書記

題せりしを撰ひて書写なる時ははつかの
ならひし国司品とみえの年々
しれは
かのこなりし風雅の旅寝おもひこく
なこの杖にて頭陀より武江の芭蕉庵に
ありしやとおもひたどりて青山といふところに
須戸ありしとて尋ねまいりてまかる
見るまゝに残ることの姫なりん世みて
ふるまゝて身仰り侍りあはれなる
三おの二

かの芭蕉庵なる翁かの三日月日記の
草稿をとり郷のかたにもちひ侍て見えて
古てはかりしきれともれとも国の
なかりし竹にとふ人の枝はましこ
年月をりなくしたひしにて佐川氏の夕
のあまし家に今の一紙のめしもありに
侍る此ゆのへくかくてありけるに
ありとて享保庚戌のとし精ちりける

るすみをあつめられたるは廿日記を
いふことはその言葉なるべし三日月日記は
俳諧のあるじ　祖翁の遺墨にて
かきとゞめ給へるを清撰に見ゆるしくて
ことしの年月におもひよりしかくて
かれこれを見るにしあつめられて　蓮二は
選場の沈人として　百世の記念には
作くりて　此俳諧三日月の意を
此やさしく此道の世にもてはやさるゝ
其人やしるとなり

享保庚戌仲秋日

蓮二居人謹序

三日月日記

芭蕉庵三日月日記

序　山素堂

ふな芭蕉の翁月に愛て何を
とゝろね梅ゝこゝに柿と待ちて
求めなしある附を敦賀の津にありて
越の名ところにあひまたえの柿を
石山のふる柿に志ありし　詞ともとゝひく

琵琶湖の月と詠し二十首三年と
思ひし山郷の折々ありありしに
文月のはじめ故の田舎に辞して
むかふ清き川のほとりはひる山の沢
下弦の頃は雨のさかりなりしかど初秋の
暮ね中の村々むかひて名月のさかり
なかれ頃より西海に名月の思ひとなし
なりとかれしを庇とおもふまゝれや

旅ならなくにかくまで月に物語り
須磨の浦をながめしに心中に流れ
ここに立ちさて入る人くる
白とをしるすきみのねむしらり須の
宿ありて衣の世をあつ行る月の
ここにたちくしふりをくるれ行く
あり白くりにて昔のこゝろよ
かくしてよせつかくれてまた遍照は

かくれなき人のよみすてし跡にて信心と
あふり猿まふし杉風源の泉わかれ
此庵のかくれ家にかつら清あり名も
まとまりて共に集りあつまりし

浪よりて進むもありけり三日の月　素堂
三日月や地は朧なる蕎麦畠　芭蕉
新らしや蔦の葉裏の三日の月　杉風
三日月や窓の障子の紋の窓　子珊
雨そそぐさやひしき三日月　依水
三日月やまだやまぬうち茶の霧　桃隣
三ヶ月や新らしからぬ桜葉汁　嵐蘭
宵の月やこよひ重さ三日の月　専吟

よるしや芦とも寒て三日晴　宗波

宵月

此あしも七分にあり宵晴　其角

三つの宮と是てらす宵の月　嵐竹

豆と柿近うりこし宵月　子珊

草庵

土釜や杉入月に嘆る　杉風

草の戸や紙ちるちる杉の月　文冨

川

月影やこのてらすね流る　岱水

こつまとや富士にかけて暮の月　北鯤

芭蕉を移ス詞　芭蕉

菊は東籬に栄へ竹は北窓の君となり

牡丹は紅白の是非にありて世塵にけ

かさる荷葉は平地に立す水清から

いつれのとしにや深川の草庵に
栖を此境に移す時芭蕉一もとを植ゆ
風土芭蕉の心にや叶ひけん数株の
茎を備へ其葉茂り重りて庭を
挟め萱か軒端もかくるゝはかり
人呼て草庵の名とす旧友門人ともに
愛して芽をかき根をわかちて
処々に送る事年々になんなりぬ

一とせみちのく行脚思ひ立て芭蕉庵
すてに破れんとすれはかれは籬の隣に
地を替てあたりちかき人々に霜の
覆ひ風のかこひなとかへすかへす
頼おきてはかなき筆のすさひにも書
残し松はひとりになりぬへきにやと
遠き旅寝の胸にいたみ人々の別
れ芭蕉の名残ひとかたならぬ侘し

つひに五とせの春秋を過して
ふたゝひ芭蕉に涙をそゝく今年
五月のまなかはなたちはなの匂ひも
さすかにとをからねは人々の契りも
昔にかはらす猶此あたりえさらて
旧き庵もやゝちかう三間の茅屋つき
〳〵しう杉の柱いと清けに削なし
竹の枝折戸安らかに葭垣あつくしわたして

南にむかひ池にのそミて水楼となして
地は富士に對して柴門景を追て
なゝめなり淅江の潮三ッまたの淀にたゝへて
月を見るたよりよろしけれは初月の夕より
雲をいとひ雨をくるしむ名月のよそほひ
にとて先芭蕉を移す其葉七尺
あまりにそよきて或は半吹折て
鳳鳥の尾をいたましめ青扇破て風

些し過くしも喰ふにたらぬやうなれど此
堂をめくりて若よりてそかの山中不枕の
類をよせて其性をちふし僧懐素は
これを筆としてしるし張旭はこれを
つくり修学の力とせしと契りて二つを
とりて此境にあそひて風るに
継れやといはるべき

名月

名月や池をめくりて夜もすから　芭蕉
川船の宮もちて山川ぞふの月　其角
川そひの畠をありく月見かな　杉風
寿濤の音にさそうし今宵月　子珊
名月に萩ある程れかゝらかな　祐志
春や月ゆふまぎれ唐ひ中　宗波

名月や菊畑しなきはなき影　百里

名月や名気とてうきて水の藍　小蜆

関戸やきてあけさきさり三日月　紫舟

家ちかし月の夜満川川寛ひ　而已

寄ひみなく頼る月の影男　菅言

名月や獨あるきの手引向　素山

名月の来ぬまよき声の懐　能堂

名月のあかりはいらぬ菓湯か　象春

卅月よ声にしかりて谷の東　松風

鯛かこふ溪しきのり月見れ　千川

名月や草の闇をも白れむ　左柳

松の木やちるを離れきえの月　卅翁

旅店

米邉と猿に冰きんまふの月　曲水

け社や月でのなし影見かり　許六

何ごとにもあらねど江の月見　里東

名月や膝をかゝへて桑のかげ　去来

山路に道迷ひして

宿かれや宿かる月の客ぶり　仝

旅の宿よかりる家月見かな　史邦

諸こゝにありて

名月や誰まつ人の引柄袋　珍碩

名月や下し吹風晴とみん　濁子

名月や灰盛りて茶すゝき観　嵐雪

橋の香や露まきふるの月　桃隣

名月やのかれ小舟の行手枠　去以

挟飼をとつて来て見る月見かな　梅雀

隠れいでて雨うち霧し名月　雨洞

名月の旦れきしこや笹ひ形　嵐蘭

名月や川音間ふ使さ　蒼祇

名月やあんなるさる醉造　仙化

山も川も素人ならぬけふの月　溪石

松浦にて

雲浦や袖そのしきふの月　呂丸

名月や帰りのさそふとめる渡せよ　重行

此句を呂丸に語りきかせ侍りけれは
作りよしと申されて

納涼のわさくるひ捨たる和漢
月のおりしてとふらひ

破風口に日影やよわる夕涼　芭蕉

煮レ茶蠅避レ烟ヲ　素堂

合歓醒ニ馬上ニ　仝

かさなれ小田のみねそや　蕉

月代見ニ金気ヲ　堂

露繁添ニ玉涎ヲ　仝

張廻り物ぞなる酔の中　蕉
幢（トバリ）とたてまつるゝ村竹　仝
挈テ帚ヲ駆ル偸ニ鼠ヲ　堂
ぬすびとは猫のおこゑを　蕉
くらひつく首かざる松の猪　仝
それとのむ旅よねを覚ゆる　仝
舟ハ鞦（ユルク）ル風早ノ浦　堂
鐘ハ絶フ日高川　仝

顔ばかり早苗の頃よときそ　蕉
会あそびけぬ放き火のうけ　仝
詫ハ激（シムニ）メ三社ヲ本ナラ　堂
韻ハ使（スニ）メ五車ヲ填（イレスト）ト　仝
花月丈山ノ闇ト　仝
篠（ゾウ）とはなく枝の露　蕉
剪テ銀ヲ點一寸　堂
莫面の庵やなと鯢らん　蕉
釣り遠頭の証とかやらし　仝

風猨喉早乾　蕉

ちゝれ清き桑の葉あれ行杖立て　堂

門を火ともして庵の夕月　蕉

霧籬顔瓢纓　堂

震浦目潛嚬　蕉

ゆるされてものに似たるもみぢ　堂

さらされ袋のね珠と眠指　蕉

山伏山平地　堂

竹畫竹小天　仝

鵁鶄窺水鉢　蕉

雲おほくかりて見れ雲やけ　堂

鳳輝き池流の森荒にひとえて　蕉

臨谷伴蛙仙　堂

元禄八月八日終

三日月塚誌

こゝに享保庚戌の夏出羽の露丸なる人くのおもひ立侍る事ありて芭蕉翁の塚を造立して此国より此郷の昔涼しさやほの三日月の羽黒山と云る遺詠ありしと今の碑面に彫して永く是れとあらんとなりけらし

凡祖の親切なるより行人の報恩なれハにや遠く翁の墓所ハ湖南の木曽寺と称して武江の深川に發句塚あり伊賀の上野に枯尾塚あり洛に翁の雙林寺に七字の謎文に石碑と云ハ近江の堅田に笠塚も越中に井波の翁塚も加賀の金澤に無縫塔あれハ越前の府中に色紙塚

ありて雑談ともして終夜の供なれば
その謂をとゞめおくなり 両と
信中の山も嶺の山眼好の總なり
あれど中古は湯や荒沢尾張は羽田の
地なれば大坂の尾も坂あり笠岡に
行なる坂ありて西国日本六十余州に
言ふ所なれば言よいまはなきごとく
三十二應の息とゞめて以て示すなり

としてり信ぜらんやえらり奥羽の
東北には生名の諸家よりしきたひてあるいは
松島の地よりあれば象潟の南に
依てかくれて残る此境をつくらし
語りしはありし此方の冥加を祈らんとも
末は桜の名もしげりぬも橋の香は
うたれて松は名もなの所さし所業
菓の地は湯わやらなんましてく

呼る月の千二百ハこゝろ羅とわかつ日かな
一句一章ハおこなはしむやはらかよ
こゝ志の深きはかんとさき人香われり
猶のひかりを今れてむかしく偲ぶら
二日月塚の一紀ハ月くよ於
あつまる人へ

黄鶴之人
庵元坊里紅拝誌

石塔供養　長歌行

三日月の影も御となりてそれ　里紅
給けり山の風薫る時　李夕
唐韻にいろはの智恵を培りて　風草
菊の葉縮の露より起り　嵐七
南蛮をそれは織にする代なき　芦錐
りよ茶にれみかりく傘　白之

素地ハまゝ町の名ハ定りて　野秋
咲初し蓮の葦を青葉　十知
飛子見てみをと流し武田流　兆而
枕の綿末も釋敬のか　一飛
東より西へ石垣の苔やしく　嘗子
なとて妬ふかれ姉しのよ宮　墨柳
小袖見ぬなくりよ猫の声も　宇兆
なくこよ砕りて休む屋松青　奉松

月の名にかゝれとはのさかり日　呉六天
雨の池ちるはこぼれ下紅葉　素
華離れこぼし落る紙の錦　夕
散は佛例は皆十八也　雛
鳥起と又と時計の口つ下り　也
御の行方き精を日　粋
縫針玉付く来て筆で畫　文
崖を埋て蓮に雲し　爾

短冊にむの梢に吹かれして　知
池にちる蓮の雫に錦かな　子
鎌に角打ちして長く傳ふ鳥　飛
虹見よ結ぶ寺の大公　兆
天地とうらへ分れて照あり　楠
几浪打ちさく立さる須河　了
むかし鬼見よ流れる滝唐ら　杏
園三椰いの松やむ森して居る　夕

しら風かくゝ姥堂の楼とより　蒙
夜の日和の雲にかゝる　七
松原を経てつゞけり左の道　濰
かる篭よおくれ私信の菜詠　之
杜宮の蔵ウモシしさかね日備え　林
晴の修蓮の篇家に拭　知
月かけてもる谷底の夕菜節　而
笠とも足あれ蔵子茶根をふ　芿
落ひ世に拂さ信瓶の手乗く　子

川へ流るゝ憶ひ流しや　柳
山谷の中も内鳴ぞか黒ね家　兆
こゑひ流るも吸物かしれ　素
肩衣とをかしてやゝ言る劉　天
みふしねく蝋のちらゝ家　素
いかめしう指てもかけて安祈　夕
おちわのくと吸ゝ白髪　淮
こゑをも締むかまゝ尽の空　七
雲の不易よ振りの藤　桃翠

羽黒山十詠

羽黒晩鐘

三ヶ月のかけて飛ぶや晩の鐘　蓮二房

南谷山桜

ありけの山より小鶯やむの声　信蘭

荒澤春雨

荒澤の谷や流るゝ春の雨　蘇守

吹越青嵐

星ひよ河ゆくろ吹越の青あらし　山濤

袖浦漁火

いさり火の裾子よ涼し袖の浦　童來

鶴ヵ岡夕霞

蓮華の霧や千代の露寒　昨嚢

月山有明

有明のかへる鳥かし月の山　倚彦

寂上川鴈

橋永や鴈も世とゝゝる上川　鷺洲

鳥海暮雪

飛鳥の声よ夜なし岸の雪　巴静

南谷紅葉

谷の戸れ物なく廣よ妙やもみち　百河佛

追加

題某埠浮

泉浮やとこ人内帳の下ゑあ　伊勢 乙由

野々味の竹や若葉のこゝろより　桃如

蕗のしむさく橋柱の佐張れ　東棠

秋鼓の詞よ岸の柳糸　午潮

雷のあと新しき月ねるふ　仙行

市濱々茶子の浮世や笹粽　玉之

唐細のゐまは起や雪の竹　夜白

春もやかすりのかゞに柳かれ　松夫

音よはる香をおしむく柳かな　朝君

名月は浮世の錢や貸にかな　京 吾仲

此宵も皆戸ゝさゝし小白かな　花字

精まそれ生海風と料る胡瓜かな　山只

名月やむかしくゞる山かつら　杜吾

偽もちと思ひ出あり志き蓑　近江 佐角

木の葉より出よこゝろ何為に　羽岳

燭きれさとよりと涼みてる汀涼　宰陀

明日ありぬ顔の首揃たゝふの桃　美濃 白狂

桐のおちれ捨くつもう團扇かな　記久坊

灌佛の泉もちうし更衣　童平

行かさしもしぬを穂梅の月　小胡

蓮もまき無恩は浅るや仏の舎　吏新

深国扇祖父の細工のあけさかな　得太

吹く夜寒の手つ家の灯火や　百冬

こゝろ通り梅に嘘をしまされ雪　沾楓

叢園の竹さくさくに氷室に　雞哉

名月や垣の雛も竜の影　栗几

女川咲や綾に息のかゝる雲　六芝

竜りんや夕影を見わく息見てさ　東羽

夕立のしころ稽ありまもの日暮　与象

藁のたの家影つんまに蛍かな　侃如

清仙に餅をくはれし牡丹かな　達支

刈捨て牛にやるゝみおそれ　鵞山

まかられね柳にさしねの月　其猿

梅ちまり葎を笠に出かな　三伍

ひやのむ咲や雛子の夕彼　隆五

深くしてまぬれ白兎やまるの山　東歩

雛子の雪や垣根に吹れ秋　半葩

枇の声やはきて雨なに枕の悠　楊枝

神かきの化粧に霜や梅の花　呂格

むめの名のあらしもしらぬ小春かな　鷺仙

海山の詠や照に佗うる網　竹路

うち結びかけて嘯や月夜の浦かな　東巴

山吹の流よりこえて鯉の鰭　蒼鳴

ちいさしも庭に模様のあはれ哉　琴尺

名月や流く向ひるを月讀　藤先

さそふらふきぬも花みて袖の花　推巴

あらしふく松も寂しき秋の暮　尾張　巴雀

鶯の聲もさえ初る余寒かな　三径

侘しうて古郷みる月夜や星の槿　香士

稲顔や風に驚つ鷺のわれ　馬六

若葉の花の扉もわたる鶯　江之

行春を年の尾と鳴く柳かな　越前　東恕

うらさくしくさくら咲そ小風姿に　紀白

海と錦の尾花にまくるあるの雲　嵐竹

春は白き月にや霞もほのか　路鵑
簾のうちもすゞしき暮る鳥かな　柳骸
皆形ちをかへりぬるゝ志らぬ哉　六枳
さびしさの漆唄やきく柳味噌　雲鼓
蜘の囲に中結して一葉かな　擔遠
引かけて栗網に志川暮れ　章吹
武士のわれ目高さや文字　山店
大名の疵ゆかしき都かな　杜舟　水嚢

吹よせの闇にはえ枇杷花　乙嵐
天人の脈つくやすゝの暮　情也
雪雨に山をかゝるる尻に　加賀之亡人　馬泉
あし枯ともの佗く八ゑの宿　梅石
神鳴やころりと恐るなかる　雨芝
雪のあはれ杉に寸尺風のなる　千代
卯のむや菊とよ加賀評判あり　半壁
風蘭や山のをうこと中につる　蓉雄

河池や柳のうけのなかりを　藪香

青川をわたりて哀や渡し川　山清

白鷺の叢笠埋む青田かな　風曲

鶯や青わか葉の下にこゑ　帝固

蜘の囲に蚊の約音の工夫哉　能登 司鄭

露掃にひとりわたり行われ戸　夏味

七夕の露に伏振し露の壇　越中 方堅

七夕のあまりを祝ふ八百合か　廉従

稔見く惜き白いやむ萩　風吹

冬枯の沖にちりてや帆かけ船　眉泉

味噌橋の間に流して何ゆかし　杜亮

涼風とはのりしてあたゝかな　應言

一あたり雲を越かねて菜の花　巴訥

椿は涼しき香るや庭の雪　林石

今宵中ハ積と満川や夜嵐　五趙

風の中に咲くすれちかりあり　斗川

竹の子も生るゝ時代や冬牡丹　一齋

山吹や落日の顔にもの語　倚彦

鶯近の行手はうかゞふこゝろ　枝中

立字の顔なを御す柳かれ　越後 丸蛙

ふえうも慈樹の名あり松の暑　貞虎

京深に我宿のたより蓮の花　如氷

もひ咲や蒙い年の心算不心算　巻耳

橋人の足の赤さや佛ゝし絅　松由

雲行く郭公通ふ月あかり　鷺洲

障子あけて来る川風の初袷　此柱

行く〳〵の花は須磨川霞かな　葉園

白鷺と波の谷ゆく青田かな　北須

横雲の一筋も涼し屛風谷　楳仙

山路に瀧も声す深草の錦　江戸 水翁

万歳の日和うしなふ鰍かな　長水

宿一つ雪吹かされ行く哉　飛弾 牛有

むさし人家の名あるを二ツ星　蓮之

こゝろやすく起ればおのゝけさは　備中 義里

汐溜りのながれの柳かな　讃岐 筆蒼

名月や鳴る鐘も青野川　筑前 杏雨

酒買の羽ふりかゝり露のむ　杏雨妻 市女

百味てもやさき雪をかへりて初名月　肥後 乙語

名月や町をまつりの御代とおり　長門 危朝

淡海むともえとも春てこぬ時雨　松醉

初秋もまくれなし三日の月　長崎 加十

添ふされ人を恨むわかれかな　其阜

扇屋の門もわれさね呉る哉　佐渡 哉樸

雨むしや松のうへ打帆かれ　素雪

かり鐘よ梢ゐる事は放生会　翁羽 世柳

湖さや風よ音まね稲の穂　李庄 英義

夕露ちのうしろ渡やすゑの峯　和仰

若松のうしろに宮もる盆ゝの宿　葉良

名月や稲の穂並の手負姿　清節

夕立に雨帯濡れや蝸牛　延穂

菅笠の姿見えて田植哉　常休

目鏡と流に浮きや藻刈舟　左説

刈まして紅葉は秋く蘆花に　捨丸

襟もともはに秋りし寒さ哉　自習

舟川の舟に乗りて秋跡小　松桂平

鶯も宿もとに見えし篝の踊りや蚕　美風

深みても山と野山と松の雨　可及

七曲八坂登りし雲の峯　羽黒 東曉

曲見のつらに流れぬ地ありの往き　百溪

朝霧やおく見える山の色　倶女

振袖と掃つくる燕子　柳染

藤の香や障子一重も山の奥　單風

紅梅や朱の鳥居の宮ぐし　素石

涼しさの声もし浪や夏の雨　く秋社

神の留守と尋ねる池の落葉かな　青上

うくひすや聞深き渦の佐女　久武

あさかほや園の廊下の椽の先　雲中

名月とむかふて行や霧の中　呂茄

立春の留守分きれ霧の外　藤嶋 竹臺

山焼くや化粧の顔も鏡　狩川 荀雨

名月や標もれの初雪　鶴岡亡人 竹郷

卯の花や世に来ぬ先や分る楓　尚七

初雪や降積く川山の形　呉天

晴ころの声のあとや聲の花　胡分

色見えて別れつくせる紅葉かな　舟英

山里や一葉錦る向り茶　松亭

秋のふみやさゝ菊の香や燈の月　渕水

雨の日やありてつゝく鶏鳴も　五蘭

うくひすや鳥はより行雁のなつかし　百丸

流星くるま飛む中程て涼かな　杂祈

姑の読経もさむき彼岸かな　三郷
流に映りて影や三日の月　一穂
菜の花に軽うて輝し夕霞　山風
吸筒も飛とまるや山さくら　千峯
住吉の橋もそこそこね霞かな　東明
うらゝ並小袖して来る花見哉　里柳
竹藪の菖蒲なりけりつばめの雨　鷺鳴
行春よ気ぬる節のおとろへ柳かな　巴水

一文は嘘とはされ唐かくし　夏夕
蚕の鍋の裏よ一筋簾の夕　羽秀
烟より日の暮るゝ頃本末は　芳仙
酒くうけ日和も寺しや蚕種　里飛
五月雨して行ところ鳴きるみちは　永甫
虹の尾にかゝり流るゝ山の時雨哉　一雲
麦蒔や東山子の寐も記り　指三
宮ゝさりとも廃くたる氷柱は　業遊

稜ら氣もなく／＼さら栗は　木止

おくれさりしも佛足の行住　如嶺

うくひすや夕日の藤の中　市閑

春風にまつちまこもの樹多は　柳吟

風の音を拾こめしる鳴子哉　可恕

名月や富士も日なかの男かな　僧 和蕙

涼しさの手に汗なる火燵哉　壺英

朝の床にかゝるよし茶花は　杜由

涼風のけとるさくや香の字　宇兆

入れはこゝさ流れし霞ふ菊　枝鴫

月に奪と変るや之村時雨　南江

通り矢の数にしつれ蕪哉　一飛

引きの岸より流むや杜若　嵐雪妻

撰や蔓に數を已るし　只白

鳥のなく日あしにきる氷哉　白之

文月孫川あれ世をとし鎧汁　素舟

弟子尼の袂にほふや花の香　野秋
夏の日や涼しも雛子の姿　十知
才佳の行に花やきのふの　兆而
大根に隣すきし蔦青葉　芦錐
稲妻の影さへ花や三日の秋　魯子
月影のあとも濁さぬ日和哉　友松
蜻蛉の巣も行になりて枯尾花　李夕
露の身をおもふも読経念仏　風草

三日月塚懐旧

世に名ある三日月塚といふを一とせ祖翁の
月雅の松山に杖をとゞめ見まはして
涼しさやほの三日月の羽黒山とされ
納涼の峯にも遊びてかなしき
あまりのあはれさや猶ひとしほなつかしく
祖のことをなつかしむにつけてやこの塚の

いまはここく杉の木末もきえかゝるよ
三日月の影そ月くまそふなる

蓮二老人

鷹も出羽の国なれはこそ
さゝては三日月の名も見かしと
みす年の暮れ笑おもりもあらし
秋のゆ乗の沾き白雲

懐木曾寺名月

李夕

月みれんひとしかりきれ
野よ寐川山とうかれ出つ
ふるさとは何ゆへ物ふかしくも
雫はよあいおく人とあさ思ふ

懐翁今塚時雨　風草

きさむしも塚とまるは
住かはる世の人のなつかし
そのまゝに置るゝ名をたてみる
時雨にかゝる武蔵野の月

懐雙林寺墨直　山嵐七

ことし和月と読しあやしへ
いまた椿の墓になりひて
時も経その中の二日には
ものうけまて墨直しける兒

京寺町二条下ル町
橘屋治兵衛板